

その問いは 何を前提にしているのか

仕事の判断と学習につなげる問いかけの実践

リクエスト株式会社 組織行動科学®



問いは、前提に立ち、前提を表し、前提を確かめ直す。

[問いと前提の関係を図で読む](#)

[一件の仕事で使う手順を見る](#)

[AIと判断をつなぐ図を見る](#)

「なぜ若手は、自分で考えないのか」

「どうすれば、AIの利用が増えるのか」

「どうすれば、相手に納得してもらえるのか」

仕事を前に進めようとして、私たちはさまざまな問いを立てます。そのとき、答えを探し始める前に確かめたいことがあります。その問いでは、何がすでに当然のこととして扱われているのでしょうか。

若手は本当に考えていないのでしょうか。AIを使う回数が増えれば、必要な仕事がよくなるのでしょうか。相手に納得を求める前に、こちらの結論を確かめる必要はないのでしょうか。

こうした前提が妥当であれば、それに立って検討を進められます。一方、前提が実際の仕事と合っていなければ、答えを詳しく考えても、取り組む対象を見誤るおそれがあります。

本稿では、仕事の判断や学習のために問うことを、何をいったん前提として置き、何を確かめる対象にするかを定める営みとして捉えます。問い直すときには、これまで当然としていたことも、検討の対象に戻します。

これは、言語学・認知心理学・組織学習・成人学習の研究を踏まえた本稿の整理です。対象は、仕事の判断・育成・対話における問いです。以下の職場例は説明のための仮想例であり、分類や実践手順は研究を仕事に応用するための提案です。

図解 1 | 問いと前提の関係

同じ仕事でも、問いで確かめる対象が変わる

前提に立つ

なぜ、この仕事は
遅れたのか

いま置いている前提
仕事が遅れた

確かめる対象
遅れた理由

前提を確かめ直す

合意した期限に対して、
遅れているのか

いま置いている前提
遅れの有無は未確認

確かめる対象
期限と実際の進み方

前提を表す：何を当然と見ているかが、問いに表れます。

本稿の三つの働きの整理。すべての問いが三つを同時に果たすわけではありません。

問いは前提に立ち 前提を表し 前提を確かめ直す

「なぜ、この仕事は遅れたのか」と聞くと、通常は「仕事が遅れた」ことを出発点として、その理由を探します。「この仕事は、合意した期限に対して遅れているのか」と聞けば、遅れが起きたかどうかを確かめることから始まります。同じ仕事についての問いでも、確かめる対象が違います。

Macagnoは、問いの前提と、会話で共有されている知識や想定との関係を分析しています。問いは回答の範囲を制約する一方、聞き手の知識や文脈によって、問いの意味や前提の解釈も変わると論じています[1]。

この議論を踏まえ、本稿では問いと前提の関係を三つの働きとして整理します。

- ・ 前提に立つ。いったん共有・確認したことを土台に、未知の点を確かめる。
- ・ 前提を表す。何を当然とし、何を問題と見ているかが、問い方に表れる。
- ・ 前提を確かめ直す。当然としていたことを、検討の対象に戻す。

すべての問いが、この三つを同時に果たすわけではありません。「納期はいつですか」という情報確認にも役割があります。前提との関係を捉えることは、日常の質問をすべて深い内省に変えることを意味しません。

図解2 | 事実・仮置き・未確認

共有した情報を、三つに分けて置く

「来月も同じ人数で対応するとしたら」

確認した事実

今月は5人で
担当している

今月の配置表で確認

仮置き

来月も5人で
対応すると置く

検討のための条件

未確認

来月は何人で
対応する予定か

決定者・時点を確認

仮定を共有できても、
事実が確定したことにはなりません。

本稿による実務上の整理。5人という人数は、区別を示すための架空の設定です。

共有していることと確かめた事実を分ける

Stalnakerは、会話の共通基盤を、参加者が会話のために受け入れている背景情報として捉えています。そこには、検討のために一時的に置く仮定も含まれます[2]。例えば「来月も同じ人数で対応するとしたら」と仮定を共有できても、来月の人数が確定したことにはなりません。

Gibbsらの二つの実験では、物語中の会話で共有されている情報に応じて、参加者が選ぶ質問が変わり、共有内容に合う質問は理解されるまでの時間も短くなりました[3]。

さらにRobertsは、「いま何を明らかにしようとしているか」という問いを中心に、会話の関連性や展開を捉える理論を提示しています[4]。実務への示唆としては、同じ資料を見ているかに加え、何を判断するために話し合っているかも確かめる必要があります。

2026年のRubio-FernandezとHarrisのレビューは、共通基盤についての形式的な理論と心理言語学の研究を整理し、背景情報を扱う仕組みを会話の状況や認知的な負荷も含めて考える立場を提案しています[5]。共有したつもりの内容が、その場で同じように使われるとは限りません。

仕事では、「事実として確認したこと」「検討のために仮置きしていること」「これから確かめること」を分けて示す。この区別を、本稿では実践の出発点に置きます。

問うことと相手に問いかけること

自分で問いを立てるときには、分かっていないことや判断したいことを定めます。相手に問いかけるときには、その人に何を答えてもらい、何を一緒に検討するかという関係も生まれます。これは本稿で仕事を考えるための区別であり、二つの日本語の厳密な語義分類ではありません。

会話分析のHeritageは、発話が情報を求める行為として理解されるかどうか、文法形式だけでなく、話し手と聞き手がその内容についてどのような知識を持つと見なされているかが関わりと論じています[6]。

またHabgood-Cooteは、答えを知っている教師の問いや、双方が答えを知らない問いも扱い、問いかけを、共有された探究を進めるため

の提案として捉える理論を提示しています[7]。これは問いかけの多様性を説明する哲学的提案であり、特定の質問方法の効果を実証した研究ではありません。

例えば「どう考えますか」という同じ言葉でも、事情を知りたいのか、理解を確認したいのか、一緒に判断したいのかによって、その後に必要なやり取りは変わります。問いかける側は目的を伝え、返答を受けて自分の見方や次の問いも調整します。

仕事で確かめたい前提には種類がある

本稿では「前提」を、言葉に含まれる前提に加え、原因の見立て、目的や評価基準、役割についての想定を含む広い意味で用います。これらは、言語学上の前提と同一の概念ではありません。仕事を見直すために、次の四つに分けて考えます。

前提として置いているもの	問いに表れる例	確かめ直すこと
起きていることの捉え方	なぜ若手は考えないのか	どの仕事の、どの言動を「考えていない」と捉えたのか
原因の見立て	どうすれば意欲が高まるのか	意欲が主な問題なのか。情報・時間・判断権限などはどうか
目的や評価基準	どうすればAIの利用率が上がるのか	利用が増えることで、誰の、どの仕事をよくしたいのか
役割や関係の想定	どうすれば相手に納得してもらえるのか	誰が判断に必要な情報を持ち、何を一緒に検討する必要があるのか

右列は、左列の前提が誤りだと決めつけるための質問ではありません。その前提を採用してよい根拠と、適用できる範囲を確かめるための問いです。

例えば、意欲が関係する場合もあれば、必要な情報や任せる範囲が不明確な場合もあります。本人と仕事の条件の両方を、具体的な一件から確認します。

問いかけが自分の見方を強めることもある

SnyderとSwannの四つの実験では、相手が内向的か外向的かという仮説によって、選ばれる質問が偏りました。さらに、その質問が、仮説を裏づけるような相手の応答を引き出す場合があります[8]。この研究は、質問の選び方が、得られる情報に関わることを示しています。

Loftusの計490人を対象とした四つの実験では、映像視聴後の質問に、ある物の存在を前提として含めると、後にその物を「見た」と報告する可能性が高まりました。実際には映像になかった物についても、同様の影響が報告されています[9]。これは、質問の表現が後の記憶報告に及ぼす影響を調べた結果です。

これらを仕事へ応用して考えると、事実確認のつもりで聞いた問いにも、確認する側の見方が入り込んでいないかを点検する必要があります。

「なぜ考えなかったのか」と聞けば、相手は「考えなかった理由」を求められます。しかし、本人は必要な条件を考えた結果、確認を待つことを選んでいたのかもしれない。

まず、「何が起き、本人はその時点で何を把握していたか」を確認する。そのうえで、判断の根拠や結果を検討する。この順序を、実務上の基本として提案します。

前提を使うことと前提を固定することを分ける

すべての問いで、目的や判断基準を最初から見直す必要はありません。確認済みの前提を共有し、それに沿って必要な情報を集めることも、仕事には欠かせません。

KlaymanとHaは、仮説が当てはまると予想される事例を調べる「肯定的検証」が、条件によっては有効な方法になると論じています。この方法を、一律に有害な確証バイアスとみなすことはできません[10]。

実務での確認点は、自分の見立てと合わない事実が出たときに、その見立てを修正できるかです。

「情報が不足している」と考えたら、情報を渡した後の判断を確かめます。変化が見られなければ、知識、経験、権限、時間など、別の説明も検討します。逆に、前提が事実で確認できていれば、「なぜ起きたのか」と原因を掘り下げる問いは有効です。

見直しの範囲と判断の時点も決めます。合意済みの条件の中で進められる仕事は進め、判断に影響する不確かな点を優先して確かめます。目的や基準に疑問が出た場合は、その決定に関わる人と検討します。問いを増やし続けること自体を成果とはしません。

前提が分からない段階から問い始められる

前提の確認が大切だとしても、前提をすべて確定するまで問い始められないわけではありません。何が分からないのかも曖昧な段階から、観察や対話を通じて問いを具体化することがあります。

Deweyは『How We Think』で、困難を感じることに、その所在と内容を定めること、解決の見通しを立て、推論と観察・実験で確かめることを、反省的思考の分析として示しています[11]。

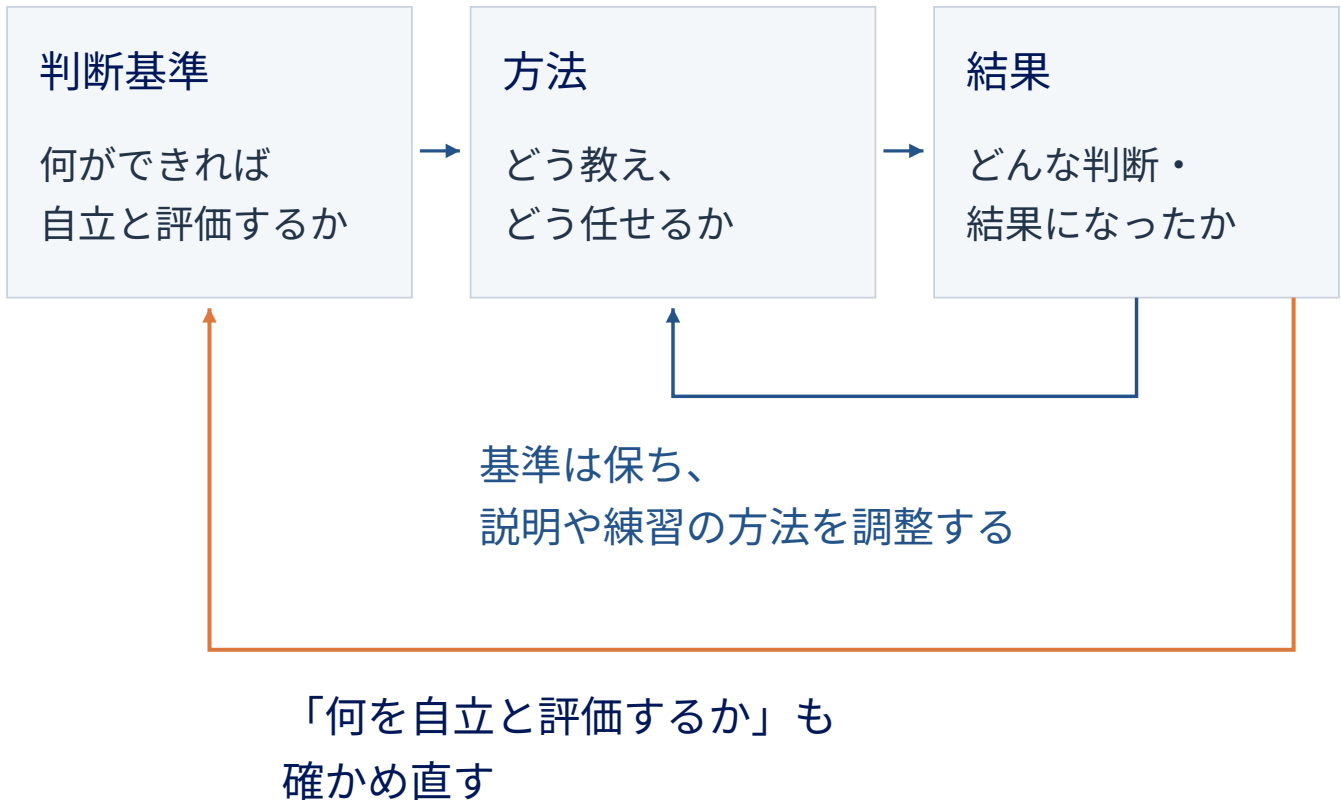
近年の哲学研究ではFalboが、誤った前提から始まる探究でも、その誤りの発見や理解の改善につながりうると論じています[12]。これは、どのような探究が認識上許容されるかをめぐる議論です。

実務では、「なぜ遅れたのか」と尋ねた後に、実は期限の変更が伝わっていなかったと分かることもあります。そのときは、問いに合う理由を探し続けず、「期限について、誰がどの情報を持っていたのか」へ問いを変えます。

問いの価値を、最初の聞き方への答えが得られたかだけで判断しない。何を確かめるべきかが明確になったことも、次の判断につなげます。

図解3 | 方法と判断基準

方法の見直しと、判断基準の見直し



見直す例

一人で処理する → 未確定の条件を見つけ、必要な確認を選ぶ

Argyrisら[13]を踏まえた実務への応用例。二つの見直しに優劣を付ける図ではありません。

方法の改善に加えて判断基準も検討する

組織学習の研究では、行動の方法を変える学習と、行動を方向づける価値や基準まで変える学習が区別されています。Argyrisらが論じるシングルループ学習とダブルループ学習です[13]。

育成の場面に応用すると、同じ評価基準のもとで説明の回数や練習方法を変える検討と、「何ができれば、自分で判断できたと評価するのか」という基準そのものを見直す検討を区別できます。

例えば、「上司に確認せず、一人で処理できること」を自立と捉えていたとします。しかし、その仕事では、未確定の条件を見つけ、適切な相手に確認し、その間も顧客との連絡を進める判断が求められるかもしれません。この場合は、教え方とともに、自立の評価基準も検討する必要があります。

成人学習の分野でも、Mezirowは、自分の理解や判断を支えている想定を批判的に省察することの役割を論じています[14]。

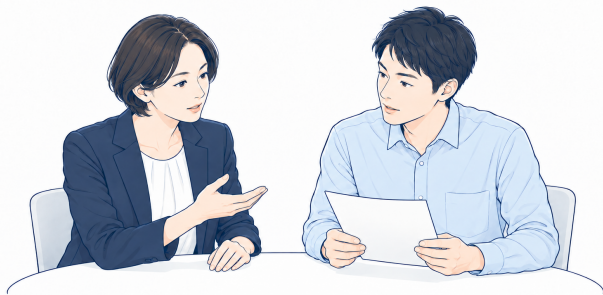
これらは、前提を見直す学習を考えるための理論的な枠組みです。問い直したことが実践上の改善につながったかどうかは、次の仕事で何が変わったかを別に確かめます。

図解 4 | 対話で前提を確かめる

問いかける側の見立ても、確かめる対象に

最初の見立て

自分で考えて
いないのでは



「考えていない」という見方が、
問いの出発点になる。

一緒に確かめる

その時点で何が分かり、
何の確認が必要だった？



本人の説明と記録を照合し、上司
の見立ても確かめる。

相手が、質問の前提を補足・訂正できることも大切です。

本稿の仮想例。見立ての妥当性は、本人の説明と当時の記録に照らして確かめます。

問いかける側の見方も検討の対象にする

「あなたは何を前提にしているのか」と問う側にも、前提があります。上司や支援者が、自分の見立てを検討の外に置いたまま相手だけに内省を求めると、検討できる範囲が狭くなります。

Argyrisらは、自分の考えを示すことと、他者とともに探究すること
を組み合わせ、見方の根拠を検討可能にする実践を論じています[13]。
仕事では、例えば次のように問いかけることを提案します。

私は、昨日の見積回答が止まったのは、判断に必要な情報が足りな
かったからではないかと考えています。その時点で分かっていたこ
とと、確認が必要だったことを教えてください。私が見落としてい
る事情はありますか。

ここでは、自分の見立てを仮説として示し、相手が補足・訂正できる
ようにしています。返答を受けたら、メールや依頼内容、当時の条件
と照合し、自分の見立ても修正します。

Eyalらの25実験からなる研究では、相手の立場を想像するよう指示す
るだけで、相手の考えなどを推測する正確さが一貫して高まる結果は
得られませんでした。最後の実験では、会話を通じて相手から情報を
得ることが、相手の意見を予測する正確さを改善しました[15]。相手
への想像に、本人から得る情報を加えることの意義が読み取れます。

また、Edmondsonによる製造企業の51チームの調査では、対人的な
リスクを取っても大丈夫だという共有認識と、学習行動との関連が示
されています[16]。これは職場調査による関連であり、この研究だけ
で因果関係は確定できません。後のFrazierらのメタ分析は、136の独
立した標本を集約し、心理的安全性の先行要因と結果を広く検討して
います[17]。ただし、本稿の問いかけ手順の効果を検証した分析では
ありません。

実務への示唆として重視したいのは、相手が質問に答えられることに
加え、その質問の前提に異議を言えることです。「考えなかったわけ

ではありません」「その条件は共有されていませんでした」という説明も、確かめるべき情報として扱います。

その場で意見がそろったことだけを、前提が妥当だとする根拠にはしません。見方が異なる点と未確認の点を残し、誰が何を確認して判断するかを決めます。

問いが出てこないときは具体的な仕事を一緒に見る

「何か質問はありますか」と聞いても、問いが出てこないことがあります。そのとき、問いを生むための材料がどこまで共有されているかも確かめたいところです。

Coenenらは、人間の探究に関する研究レビューで、どの可能性を考慮するか、どのように問いを生み出すかという問題を扱っています。具体的な仮説を先に持たなくても、既有知識や文脈から「ここはまだ分からない」と気づき、問いが生まれる場合があると論じています[18]。

Rosenshineらの介入研究レビューでは、読んだ内容について質問をつくる方略を教えることが、その後の読解テストの成績向上につながったと報告されています[19]。対象は主に読解の学習であり、質問を促すだけで職場の判断力が高まるという結果ではありません。

これらを踏まえた実務上の提案として、実際の依頼メール、図面、過去の成果物などを一緒に見ながら、分かるところと判断が止まるところを確かめます。

「この依頼に応えるには、誰が何を決める必要がありますか」「いま分かっていることはどこまでですか」「このまま進めると、どこで確

認が必要になりそうですか」。具体的な仕事を手がかりに、次に確かめる点を見つけていきます。

必要な知識がまだない場合は、情報や判断例を示してから一緒に問いをつくります。「自分で考えて」と問いだけを返し続けず、本人が検討に使える材料を整えます。

図解 5 | 一件の仕事から振り返る

一件の仕事を、次の判断につなげる

架空の例：見積回答が翌日に持ち越された



本人の動き方と、上司の渡し方・任せ方を一緒に見直します。

本稿の実践提案。一件の成功だけで原因を確定せず、異なる条件でも確かめます。

一件の仕事から前提を確かめる

ここからは、研究を踏まえた実践手順の提案です。職場全体や人物の傾向を一度に評価するより、判断が止まった一件を取り上げると、確かめる対象を具体化できます。

確かめる対象	問いの例
起きたこと	いつ、どの仕事で、何が止まりましたか。合意した期限や記録では、どうなっていますか
当時分かっていたこと	本人には何が分かり、何が分かかっていませんでしたか。周囲は何を共有していましたか
判断の根拠	何を重視して、その対応を選びましたか。ほかに考えた対応はありましたか
目的と判断基準	この仕事は、誰にとって何ができれば完了ですか。確認すべきことと、本人が決められることは何ですか
見立てを修正する条件	どんな事実が分かれば、いま考えている原因や対応を見直しますか
次の実践	次の一件で何を変えますか。誰が、いつ、どの結果を確かめますか

例えば、見積回答が翌日に持ち越された仕事を考えます。上司は「自分で考えて動いていない」と見ていましたが、本人は「価格条件が未確定だったため、確定を待った」と説明しました。

ここで、当時の依頼メール、価格条件、承認の範囲、確認の履歴を一緒に見ます。すると、本人の説明と記録が合っているか、価格が決ま

るまでにできた連絡は何か、誰への確認が必要だったかを検討できます。

次の一件では、未確定事項を整理し、確認する相手と期限を決め、顧客には回答予定を先に伝えることを試します。見直す対象には、本人の動き方と、上司の情報の渡し方・任せ方の両方が含まれます。

結果を確かめる際は、回答までの時間に加え、内容の正確さ、手戻り、確認の適切さなど、その仕事で必要な観点を選びます。一件うまくいっただけで原因を確定せず、異なる条件でも確かめます。

AIに問いかけるときも仕事の目的を確かめる

ここでは、AI活用への応用例を示します。

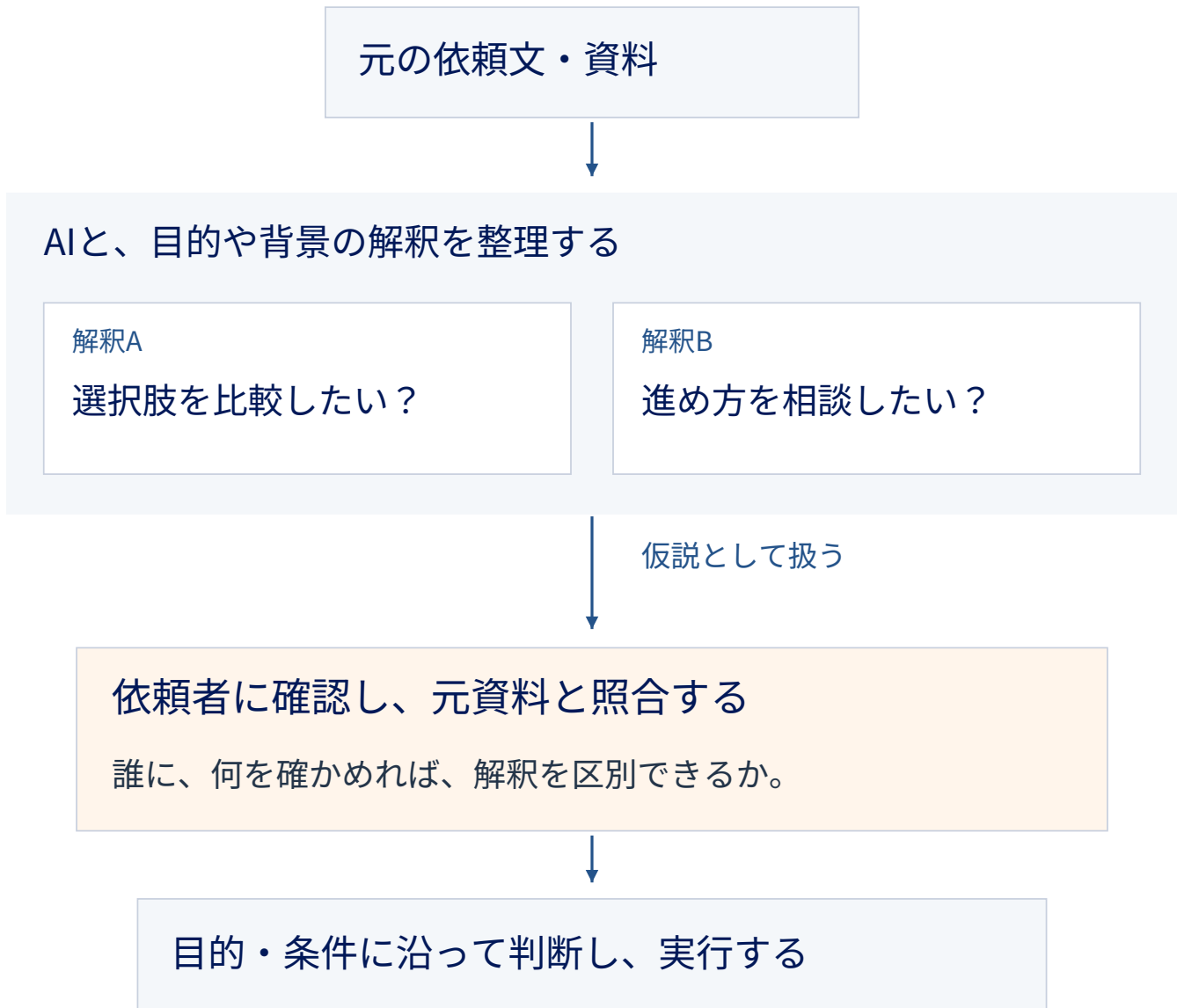
「AIで提案書を早く作るには」と問うことが役立つ場面はあります。その前後に、「相手は何を判断するために提案書を必要としているのか」「判断に必要な事実はそろっているのか」「何が未確認なのか」を確かめる問いも置きます。

AIへの依頼例としては、次のような形が考えられます。

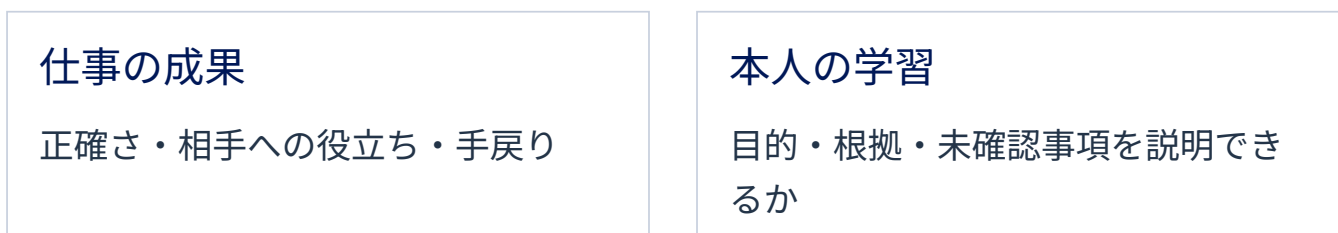
この依頼文から読み取れる目的を、確認できる事実と推測に分けて整理してください。別の解釈も挙げ、どの解釈が合っているかを判断するために、誰に何を確認するとよいか提案してください。

図解6 | AIと判断をつなぐ

AIの説明を、仕事の事実で確かめる



二つを分けて確かめる



本稿の実務提案。引用研究がこの図の手順や依頼文の効果を検証したものではありません。

この使い方では、AIが示した目的や背景を仮説として扱い、依頼者への確認や元資料との照合に進みます。仮説を多く出せたことと、必要な事実を確かめられたことは、別に評価します。

AIを使って課題を進められることと、本人が学習したことも分けて確かめます。Bastaniらの高校数学の無作為化比較試験では、AIを使える練習中の成績は上がりましたが、一般的な対話型AIに近い支援を受けた群では、AIを外した試験の成績が対照群を下回りました。学習を支えるよう設計した別のAIでは、この悪影響が大きく緩和されました[20]。効果は支援の設計や条件に依存しており、職場のAI全般へそのまま一般化はできません。

ここでの依頼文は、本稿の実務提案です。引用研究がこの依頼文の効果を検証したわけではありません。実際の仕事では、出力の完成度に加え、本人が目的・根拠・未確認事項を説明し、次の一件に必要な確認を選ぶかを見ます。

問いの後に何を確かめ直せたかを見る

問いかけを実践につなげるために、振り返りでは次の四点を短く残すことを提案します。

- ・最初に当然だと考えていたこと
- ・新たに確認できた事実と、まだ分からないこと
- ・維持する判断と、変更する判断
- ・次の仕事で試すことと、結果を確かめる時点

問い直した結果、最初の前提が妥当だと確かめられることもあります。その場合は、根拠と適用できる条件が明確になったことを残します。前提を変えた場合は、何を根拠に変え、仕事の進め方をどう変えるかまで具体化します。

「なぜ、そうしなかったのか」と問いかけようとするとき、自分が「そうできるはずだ」と考えた根拠も確かめてみる。相手の説明を聞き、実際の仕事と照合し、次の判断と一緒に検討する。

その往復を重ねることを、仕事の判断と学習につながる問いかけの実践として提案します。

研究の位置づけと参照範囲

本稿は、2026年10月1日までに公表された文献のうち、問いと前提の関係を考えるための理論、心理実験、会話分析、教育研究、組織研究、AIによる学習支援の研究を選び、20件を参照した実務解説です。職場での問いかけに関わる主要な論点を横断して整理しています。

調査では、questionsとpresuppositions、common ground、inquiry、epistemics、question generation、psychological safety、generative AIとlearningなどを組み合わせてウェブ検索し、関連文献の参照先も確認しました。採用にあたっては、本稿の主張との関係、原著・著者公開資料・出版社や著者所属機関での確認可能性、研究方法と適用範囲を検討しました。

全件に統一した検索式や選定手順を適用したシステマティックレビューではありません。哲学・言語学の全領域、すべての言語や文化、個別業種の実践研究を網羅したものでもありません。対象を定めた文献に基づき、実務で確かめるべきことを提案する位置づけです。

本文の根拠は、原著本文または確認可能な該当章・節を基本とし、Gibbsら[3]、KlaymanとHa[10]、Mezirow[14]、Rosenshineら[19]、Frazierら[17]については公開抄録で確認できる範囲を用いています。理論的提案、実験結果、観察上の関連、レビューの結論を区別し、文献番号を対応箇所に付しています。

本稿の職場例、前提の分類、実践手順、AIへの依頼例は、リクエスト株式会社による整理・提案です。研究者が提示した尺度や検証済みプログラムとして扱うものではありません。実際の仕事の条件と結果に照らして活用することを想定しています。

参考文献

- [1] Macagno, F. (2026). Common ground and the presuppositions of questions. *Intercultural Pragmatics*, 23(1), 27–51.
[DOI 10.1515/ip-2025-8005](https://doi.org/10.1515/ip-2025-8005)
- [2] Stalnaker, R. (2002). Common ground. *Linguistics and Philosophy*, 25, 701–721.
[DOI 10.1023/A:1020867916902](https://doi.org/10.1023/A:1020867916902)
- [3] Gibbs, R. W., Jr., Mueller, R. A. G., & Cox, R. W. (1988). Common ground in asking and understanding questions. *Language and Speech*, 31(4), 321–335.
[DOI 10.1177/002383098803100402](https://doi.org/10.1177/002383098803100402)
- [4] Roberts, C. (2012). Information structure in discourse: Towards an integrated formal theory of pragmatics. *Semantics and Pragmatics*, 5, Article 6, 1–69.
[DOI 10.3765/sp.5.6](https://doi.org/10.3765/sp.5.6)
- [5] Rubio-Fernandez, P., & Harris, D. W. (2026). Common ground: Between formal pragmatics and psycholinguistics. *Annual Review of Linguistics*, 12, 249–271.
[DOI 10.1146/annurev-linguistics-041824-032410](https://doi.org/10.1146/annurev-linguistics-041824-032410)
- [6] Heritage, J. (2012). Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 1–29.
[DOI 10.1080/08351813.2012.646684](https://doi.org/10.1080/08351813.2012.646684)
- [7] Habgood-Coote, J. (2026). Asking a question is a proposal in shared inquiry. *Australasian Journal of Philosophy*. オンライン先行公開、2026年7月30日。
[DOI 10.1080/00048402.2026.2680296](https://doi.org/10.1080/00048402.2026.2680296)
- [8] Snyder, M., & Swann, W. B., Jr. (1978). Hypothesis-testing processes in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36(11), 1202–1212.
[DOI 10.1037/0022-3514.36.11.1202](https://doi.org/10.1037/0022-3514.36.11.1202)
- [9] Loftus, E. F. (1975). Leading questions and the eyewitness report. *Cognitive Psychology*, 7(4), 560–572.
[DOI 10.1016/0010-0285\(75\)90023-7](https://doi.org/10.1016/0010-0285(75)90023-7)
- [10] Klayman, J., & Ha, Y.-w. (1987). Confirmation, disconfirmation, and information in hypothesis testing. *Psychological Review*, 94(2), 211–228.
[DOI 10.1037/0033-295X.94.2.211](https://doi.org/10.1037/0033-295X.94.2.211)

[11] Dewey, J. (1910). How we think. D. C. Heath. 第6章、pp. 68-78を参照。

[Brock大学による原著公開資料](#)

[12] Falbo, A. (2024). Inquiry for the mistaken and confused. *Philosophy and Phenomenological Research*, 109(3), 962-985.

[DOI 10.1111/phpr.13089](https://doi.org/10.1111/phpr.13089)

[13] Argyris, C., Putnam, R., & Smith, D. M. (1985). Action science: Concepts, methods, and skills for research and intervention. Jossey-Bass. 第3章・第8章を参照。

[共著者による章別公開資料](#)

[14] Mezirow, J. (1998). On critical reflection. *Adult Education Quarterly*, 48(3), 185–198.

[DOI 10.1177/074171369804800305](https://doi.org/10.1177/074171369804800305)

[15] Eyal, T., Steffel, M., & Epley, N. (2018). Perspective mistaking: Accurately understanding the mind of another requires getting perspective, not taking perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 114(4), 547–571.

[DOI 10.1037/pspa0000115](https://doi.org/10.1037/pspa0000115)

[16] Edmondson, A. (1999). Psychological safety and learning behavior in work teams. *Administrative Science Quarterly*, 44(2), 350–383.

[DOI 10.2307/2666999](https://doi.org/10.2307/2666999)

[17] Frazier, M. L., Fainshmidt, S., Klinger, R. L., Pezeshkan, A., & Vacheva, V. (2017). Psychological safety: A meta-analytic review and extension. *Personnel Psychology*, 70(1), 113-165.

[DOI 10.1111/peps.12183](https://doi.org/10.1111/peps.12183)

[18] Coenen, A., Nelson, J. D., & Gureckis, T. M. (2019). Asking the right questions about the psychology of human inquiry: Nine open challenges. *Psychonomic Bulletin & Review*, 26(5), 1548–1587.

[DOI 10.3758/s13423-018-1470-5](https://doi.org/10.3758/s13423-018-1470-5)

[19] Rosenshine, B., Meister, C., & Chapman, S. (1996). Teaching students to generate questions: A review of the intervention studies. *Review of Educational Research*, 66(2), 181-221.

[DOI 10.3102/00346543066002181](https://doi.org/10.3102/00346543066002181)

[20] Bastani, H., Bastani, O., Sungu, A., Ge, H., Kabakçı, Ö., & Mariman, R. (2025). Generative AI without guardrails can harm learning: Evidence from high school mathematics. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 122(26), e2422633122.

[DOI 10.1073/pnas.2422633122](https://doi.org/10.1073/pnas.2422633122)